

建築主：国立大学法人千葉大学
設 計：鈴木 弘樹 + 田中 朋久
施 工：山内工業株式会社
所在地：千葉市中央区亥鼻1-8-1
千葉大学亥鼻キャンパス内

入 賞

一般建築物の部

由緒あるキャンパスに舞い降りた白い襞の小ホール
千葉大学ゐのはな同窓会館

135年の歴史がある医学部の同窓会館として、小ぶりで清楚なモニュメントが生まれた。主な施設として存在感のあるシンボリックでキュービックなホールをはじめ、低層部の合宿施設等、すべての外壁は真っ白に塗られ、古い医学部キャンパスの中で異彩を放っている。緑陰の中に舞い降りたようなホールは、作者が言う人体の肋骨のアナロジーとして与えられた深くピッチの狭い庇の構造体が特徴的である。写真では大きなスケール感を見せるが、現場に立つと思いの外可愛らしい視覚的効果が印象的だ。あの「室生寺」の五重の塔を誰もが想起することだろう。配置上の軸線に関する記述もあるが、現場に立つとそれほど強く意識されることはない。建物の関係性や内部空間の機能よりも、この外観のイメージが全てを決めたのではないか。

生物体の建築的表現は、近代・現代建築の中でも時折試みられてきたことだ。しかし、この作品ではモダニズムの直線的な抽象性が凌駕し、有機的な生々しさや複雑さは全く感じられない。どこまでも白い全体の意匠がさらにそれを強調している。この秀作が長く美しく使われることを願いたい、そのための持続可能な維持管理の仕組みをぜひ構築してほしい。（岩村 和夫）

南東外観
医学部135年の歴史を屋根の重なりで表現 ホールの高さは正門から13.5m



ホール内観
窓によってキャンパスの風景が切り取られている
キャンパスの軸と建築物がっている



(撮影/佐藤信太郎)

建築主：篠原氏
設 計：有限会社稗田総合建築設計事務所
施 工：石井工業株式会社
所在地：印旛郡酒々井町

入 賞

住宅の部

人も物も大きな環境の中で存在することを楽しむ

篠原久雄邸

大型商業施設に道一本隔てて建っているこの住宅は、建築面積80.79㎡、延べ面積124.36㎡、木造2階建の専用住宅である。環境負荷の低減に配慮され、その他、独自の取組や提案がなされている。構造材から仕上げまで、徹底したサンプスギの使用と、冬は薪ストーブ、夏は天窓からの重力換気によってエアコンなしで暮らすというさんむフォレストの提案により実現した。さんむフォレストというグループは、サンプスギですまいを造る地産地消のすまいづくり運動を続けてきた。当初の木材利用を森林再生につなげようという着想が、運動を続ける過程で資源循環のすまいづくり、地域づくりの運動へと変わっていった。地域の資源を扱う運動は当然地域の風土にかかわる。運動は、地域全体の資源循環の問題として捉えなければ森林だけが単純に再生することは、ありえないのだと気づかされた。外壁もすべてサンプスギの赤身板張りで、まったく塗装はされていない。この住宅での塗装は内部床の植物油と一部の建具以外になく、それ以外はすべてサンプスギの素地のままである。

外部の杉板はいずれ劣化し、シルバーグレーに変色する。地域づくりにつながる表現として、隣の大型商業施設とは対象的な佇まいとなっている。

(圓崎 直之)



全てサンプスギ赤身の素地



吹抜けと薪ストーブ
すまいづくりの残材はエネルギー利用する